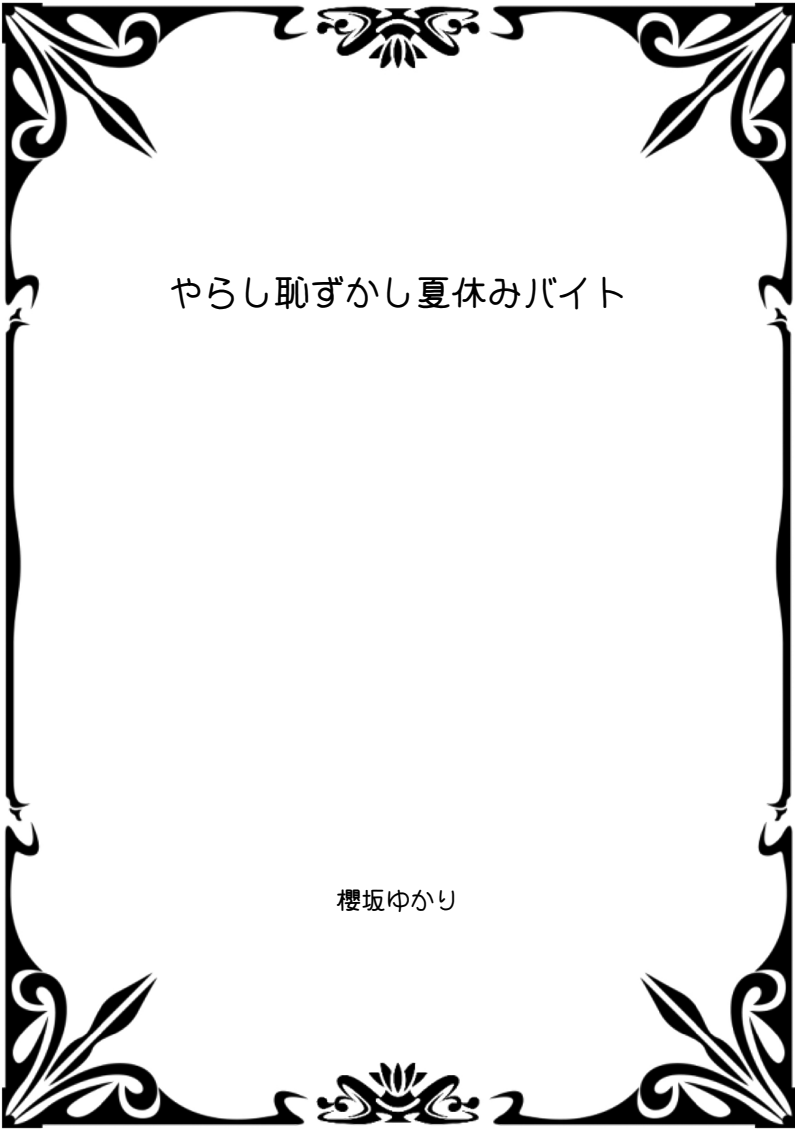




やらし恥ずかし
夏休みバイト

櫻坂ゆかり



やらし恥ずかし夏休みバイト

櫻坂ゆかり

7月半ばの暑い日ざしのもと、春日井朱里（かすがい・あかり）はとある雑居ビルへと入っていった。アルバイト面接を受けるためだ。

朱里が通う大学は長い夏休みに入ったため、有り余る時間を活かしてお小遣いを稼ごうと思ったからだ。朱里はまだ1年生のため、就職活動も始めておらず、時間は存分にあった。

今回の面接をどうして受けようと思ったかというところ……。

業務内容は「海の家（従業員）」ということだったが、給与があり得ないほど高く、興味をそそられて応募する気になったのだった。

「海の家での接客ってだけなのに、なんで時給1500円なんだろう。ひょっとしたら、大変な業務があるのかも。なんか……胡散臭い！」

最初、その求人広告を見たときには、そこから漂う怪しい空気をプンプン感じ取って警戒していた朱里だったが、時給1500円の誘惑はとてつもなく大きく、「面接を受けるくらいならいいかな。無理そうなら断ればいいし。そもそも、こんな好待遇なバイトなら、応募が殺到して不採用になっちゃうかもだし」という風に考えが変わり、とりあえず面接を受けることにしたのだった。

ビルの簡素な一室内にて行われる面接。

面接官二人は、どちらも人の良さそうな30がらみの男性で、朱里の面接は、滞りなく進んでいった。向かって右側に座っている七三分けの方の男性が、どうやら海の家の店長らしい。

向かって左の男性は「チーフ」と名乗った。

小さな窓からは、明るい夏の陽射しが降り注いでいる。

「では次に、業務内容についてご説明いたしますね」

朱里への質問を3つ4つ終えた後、店長が切り出した。

「はい！」と元氣よく答える朱里。

「今回、募集させていただいておりますのが、住み込みで来ていただく店員として、主に『レンタル品の貸し出し・受け取りなどの受付』『調理場での調理』『お料理やドリンクの販売、配膳』『レジ打ち』の業務をしていただきます」

そこで言葉が切れたので、朱里は相槌をはさんだ。

店長は言葉が続ける。

「で、住み込みなのですが、問題ないでしょうか？ もちろんお一人用の住宅をご用意しております」

「はい、問題ございません！」

「その他、条件面について、何か問題ないでしょうか？」

「問題ないです！」

力強く言い切る朱里。

時給に目がくらみ、必死なようだ。

「では最後に少し注意事項の追加を」

ここで初めて、向かって左側に座っているチーフが口を開いた。

「ご存知の通り、時給は通常より高めで設定させていただいてます。これには理由がありました」

朱里は内心「やっぱり！」と思った。

そして、チーフを見つめ、その言葉の続きを待つ。

「先ほど店長が申し上げました業務はあくまでも基本ということと捉えていただきます。そして、それ以外にも、色々業務が発生した際には、こなしていただきたく思っています。もちろん、指導はしっかりさせていただきますし、そんなに難しい業務というわけでもないのです」

「えっと、具体的にはどんなことを？」

思わず朱里が尋ねた。

「それはもう様々でして、何か発生次第、臨機応変に対応していただくということ」

言葉が濁した感じで、店長が答える。

朱里は、業務内容を詳しく知れないことで、ちよっぴり不安を感じたものの、「だからこそその時給1500円なのだ」と思えば、仕方ないことのように思えた。

そう、初めに店長が言った程度の業務なら、こんな時給をもらえるはずがない。

それほど難しい業務はないとチーフも断言してくれたし、きつと何とかなるはず、と朱里は考えた。

「問題ございませんでしょうか？」

チーフが尋ねる。

「はい！ どんな業務でも、全力で取り組みたいと思っております。やる気だけは誰にも負けませんので、是非よろしく願います！」

朱里は笑顔でそう言うと、軽く頭を下げた。

「いいお返事ですね。それでは、採用とさせていただきます」

同じく笑顔で言う店長。

その言葉に、朱里は「ええ?!」と言い、口をあぐり開けた。

「春日井さんのように元気な方を求めていますよ。えっと、来週から早速勤務開始可能ということでしたね。それまでに、水着やエプロン等、支給品はお届けいたします。ああ、そうそう。もし万が一、『この業務は無理』と思われた場合は、必ず現場の誰かに一言伝えてから、帰られるようお願いいたしますね」

「そ、そんなにキツイ業務なんですか？」

心に不安がよぎる朱里。

「多分、問題ないとは思いますが、念のため」

店長は微笑みを浮かべたままだ。

「了解いたしました！ でも、出来る限り、全力で誠心誠意、取り組ませていただきますね」

「ありがとうございます。では本日はお疲れ様でした」

3人はお辞儀を交わし、面接は終了した。

家に帰り着いた朱里は、狂喜乱舞した。

まさか、その場で即決してもらえとは思ってなかったので、喜びはあふれてきて尽きない。

「こんな好条件のバイトで即採用だなんて！」

思わず独り言を言う朱里。

ほんの少しの不安はまだ残っていたが、「何とかなるだろう」と思って、気にしないことにした。

そして、翌週月曜。

早速、用意された住宅に入居した朱里は、初勤務へと向かった。

この日は、午後1時から5時までの勤務だ。

やがて海の見えるあたりまでたどり着いた朱里の眼前に、賑わうビーチが広がっていた。

先週、朱里が下見したときより、人混みが激しいように思える。

太陽は眩しく照りつけ、海や砂粒をきらめかせていた。

意気揚々と海の家へと向かった朱里は、教えられた裏口から入り、早速更衣室で着替えることに。

着替えるといっても、下にピキニを着てきているので、上着を脱いで、エプロンをつけるだけだったが、ピキニもエプロンも、店側から支給されたものだ。

エプロンは色鮮やかな柄で、にぎやかな印象だった。

一方、ピキニはピンクの上下セットで、ボトムスにはパレオもついている。かわいい感じなので、朱里は内心ウキウキしていた。

「えええっ?!」

更衣室へ入るや否や、朱里は驚きの声をあげる。

それもそのはず、入ったその狭い一室は、2面がガラス張りだったからだ。しかも、そのガラスの向こうには、水着姿の男性が大勢いるのが見える。

みんな、朱里に気づいた瞬間、一斉にこちらを向いた。

目をキラキラさせながら。

「ちよつと〜。なんで、更衣室がガラス張りなのよ〜」

でも、着替えないと、お仕事を始められない。

それに、着替えといっても、上着を脱いでエプロンをつけるだけだし、さほど恥ずかしがることもないのかも……と思った朱里は、黙って脱ぎ始めた。

ガラス越しに、多くの男性が食い入るように朱里の一挙手一投足を見つめているのが、はっきり見てとれる。中には生唾を飲み込むような仕草を見せる若い男性までいた。

上着を脱ぐと、それに引つ張られてトップスが外れてしまうハプニング発生。

「おお〜」

外の男性陣を大喜びさせる結果に。

その歓声は、ガラスを隔てた中まで聞こえるほどだ。

「いやんっ！」

朱里は慌てて、ビキニのヒモを結びなおす。

ガラス側に背を向けて着替えているため、ばっちり正面から見られたわけではないのだが、それでも朱里の羞恥心を刺激した。

「もう。ほんと何なの、このガラス張りの構造！」

こっそり文句を言う朱里。

しかし、もたもたしている時間はない。

勤務開始まであと数分となっている。

すぐに朱里は穿いてきたミニスカートを降ろした。

ただし、今度はビキニが外れないように、慎重に。

「うお〜」

またもやあがる歓声。

ガラスの外からは、後姿が見えているだけなのに、この盛り上がりだ。

何となく、少しだけ気分がよくなった朱里は、ビキニの上から手早くエプロンをつけると、男性陣の方へ自ら向き、「オー、イエー！」と叫んでみた。

満面の笑みで、ガッツポーズと共に。

すぐに、ガッツポーズと掛け声を返す男性たち。

ノリノリである。

朱里も男性陣も。

そして業務開始となったが、店内の活気には、朱里は大変驚かされた。裏口から入るときには、さほど感じてなかったのだが。

「でも、更衣室での私の個室ミニライブでも、あれだけのお客さんが来てくれたから、あり得ることであるかな。この賑わい」

朱里は密かにそんなことを考えていた。

また、男性客が圧倒的に多いのが、はっきり見てとれる。

「さっきの個室ミニライブでも、男性ばかりだったしなあ。偶然かも」
朱里はあまり気にしていない様子だった。

1時間ほど、調理場で調理したり、配膳したり、注文を聞いたり、を繰り返した。

お客さんは大人数だったものの、朱里にとっては、さほど大変でもなさそうだった。

元々、料理が大得意で、過去にコンビニやカフェでのバイト経験も豊富だったためだろう。

朱里はこの日から入る新人ということで、ひととき男性客の注目の的だったが、それもかなり朱里の気分を良くしていた。

中にはニヤニヤと露骨にいやらしそうな視線を、朱里のピキニ姿に向ける男性客もちらほらいたが、仕事に集中していたこともあり、さほど気にならないようだ。

店内で働く店員は、朱里を含めて三名だった。

他の2人は先輩ということで、細々したことを朱里に懇切丁寧に教えてくれる。そのため、すぐに朱里は先輩たちと仲良くなった。

しかし、午後2時半ごろにちょっとした出来事があった。

注文を取りに、テーブルまで向かった朱里だったが、注文を聞き終えて厨房へと引き返す際、客の手が自分のお尻に当たったような気がしたのだ。

偶然かな、そう思った朱里は、特に気に留めることもなく、厨房へと戻った。

やがて料理とドリンクをトレイに載せ、そのテーブルへと戻ってきた朱里。

しかし、ドリンクを置いてトレイを空にしたその瞬間、目の前に座っている中年の男性客が、露骨に手を回して、朱里のお尻を撫でた。

驚いて、息が詰まる朱里。

声も出ずに固まる朱里に、にやつきながらその男性客が言った。

「新人ちゃんかあ。いいケツしてるな。名前なんていうの？」

「ちょっとおじさん、露骨過ぎるって」

真向かいに座っている、連れの若い男性がなじるように言う。

こっちの人はけっこうなイケメンだと、朱里は思った。

そういうやり取りがある間も、中年男性の片手は自分の口ヒゲを、もう一方の手は朱里のお尻を小刻みな動きで撫でさすっている。

「別に水着の上からだし、いいだろ。害はない」

平然と言い切り、撫で続ける中年客。

そこで、ハッと我に返り、名前を尋ねられていたことを思い出した朱里は、律儀に答えた。

「春日井朱里と申します」

「朱里ちゃんかあ。なあ、朱里ちゃん、これあげるから、水着の中に手を入れてもいい？」

そう言いつつ、中年客は懐から千円札を取り出した。

「ええっ?!」

突然のことに慌てる朱里。

「大丈夫。ほんの1分間だけだし。それに、お尻だけ。な、な、いいだろ？」

中年客は懇願するように手を合わせている。

でも、朱里もさすがに、そんなことをされるのは嫌だった。

なので、言いにくそうに答える。

「ここは、そういうお店じゃないので……」

「いや、以前、別の子が触らせてくれたぞ。そっか、もう触れないのか。じゃあ、ここに来る意味もないな。

二度と来るか」

わざとらしく、怒った様子を見せる中年客。
だが、朱里は焦った。

自分のせいで、店の売り上げを下げてしまうのでは、と。

そして、自分は首になるのではないかと。

なので、すぐに朱里が言った。

「す、すみません。ダメってわけじゃなくて。あの……1分間、お尻だけなら、我慢します」

「なに、我慢？ わしに触られるのがそんなに嫌なのか。わしは最低で、下卑た輩というわけか。そんなヤツに触られるなんて嫌だが、なんとか我慢してやろうと？ ああ、そうかい！ 傷ついたよ。もうこの店には二度と……」

「いえ、そういう意味ではないです！ その、言葉のあやです。喜んで……さあ、どうぞ」

中年客の言葉を慌てて遮りつつ、くるとターンしてお尻を向ける朱里。

「おお、そうかい！ こいつぁありがてえ！」

威勢よくそう言うと、中年客はおもむろに朱里のお尻に再び手を伸ばした。

そして、水着の隙間から指をゆっくり入れてゆく。

3本の指をそうして水着内に滑り込ませると、やがて激しくまさぐり始めた。

「あはあ、激しすぎます。そんなに……」

思わず、朱里は色っぽい声を発する。

「いやいや、まだまだ」

ノリノリの中年客は、ますます手の動きを早めた。

柔らかで、それでいて弾力もある瑞々しいお尻を、無我夢中でこすってゆく。

「1分まだですかあ？」

「わしの時計ではまだ20秒しか経つたらんよ」

朱里の問いにそう答えると、中年客は朱里の水着内に入れた指を少しずらすような仕草をした。

「ひいあっ！」

声をあげる朱里。

「ちよっと、お客様！ お尻だけっていう約束……！」

それもそのはず、中年客の指は、いつしか尻こぶたではなく、真ん中やや前方、果肉への入り口の方に回ってきたからだ。

激しい動きはそのままに、さらに中年客の指が進んでゆく。

「ああんっ、そんなところ……」

「いや、これも尻だ。問題ない」

「ち、違いますよ！ お尻じゃなく、今もう、前の方まで来て……ひゃんっ！」

中年客の指は、やがて朱里の敏感な豆を探り当てたのだ。

「大丈夫だ、問題ない」

キリッとした真顔で呟く中年客。

本人はイケメンのつもりらしい。

「いやいやいや、おかしいですよ！ そんな真面目顔には……あはあん……騙されません！ お尻だけってさっき言ってたでしょっ……あんっ……。もう、ダメですっ！」

口では必死で抵抗するものの、朱里はその場から強引に逃げ出したり、客の手を掴んで引き離したりすることはできなかつた。

もしそんなことをすれば、たちまちさつきみたいに「もう二度とこんな店に来るか」と吐き捨てて、中年客は立ち去ってしまうだろう。

そして、そんなことになれば、自分が首になるのは明白だ。

それは、朱里としては困る！

こんな割のいいバイトを逃しては！

なので、朱里は必死に言葉で説得を試みた。

いつしか、朱里は前かがみの体勢となっており、お尻をグイッと中年客へ差し出しているかのような格好になっている。

快感のため、大きく身体を揺らしつつ。

「ダメです……あああ……もう1分経ってます……よお……はんっ」

「あれれ？ おつかしいなあ、まだわしの時計では15秒しか経ってないよう。てへぺろ」

「あ、戻った！ さっき20秒って言ってたのに！ なんで、さつきよりも時間が戻ってるんですかあ！」

こういう状況にも関わらず、ついつい笑みをこぼしてツツコミを入れてしまう朱里。

「そして、ああん……そんなに可愛く言っても無駄です。お客様……あんっ……子供じゃないでしょ」

「いいツツコミをいただきました！ そしてわしは、もっと手を水着の奥へと

『ツツコミ』ましようかねえ」

「全然うまくないです！ あんっ……全然、うまく言えてないですからっ！」

いつの間にやら、巧みな指さばきで、中年客は、その敏感な豆の皮を剥き、さらに感度が増した豆を激しくいじっていた。

「ひゃあああっ！」

朱里の声も大きくなる。

ますます、身体は前かがみとなり、大きく揺れていた。

ここまでそんな余裕もなかった朱里が、苦し紛れに周りを見回すと、なんと店内にいる客も店員も、全員がこちらを向いている。

それも、特に驚いたり、呆れたりする様子もなく。

みんな、楽しげに笑いながら。

「ちよっと、皆さん！ ああつ、助けて……！」

「もう10秒済んだから、あと50秒で終わるし、頑張てよう。ぼくちゃんも頑張るからっ」

「まーた、時間が戻ってる！ あんっ、あと……また可愛く言ってもダメですっ！」

「ぼくちゃん、能力者だから、超能力が使えるんだ。だから、まーだ5秒しか経ってない！」

「ちよっとぐ！ どんどん時間が戻って……あんっ、卑怯です！」

皮を剥かれた豆を直接なぶられて、立っているのも辛そうにみえるほど、朱里の膝はガクガクとなっていた。しかし、中年客の指は止まることなく、今度は、濡れた窪みの中へ。

「あひゃあっ！ そこ、だめえっ！」

すでに甘やかな花蜜を吹きこぼしている窪みへと、中年客の指3本がするりと入る。

そして今度は、指だけでなく、腕全体を激しく突き動かしてきた。